

目次／テーマ展「火山灰から社会をよむー10世紀の巨大噴火と北東北ー」表紙／いわて研究ノート「岩手のカワシンジュガイの現状と、保全に向けた調査」 p.2-3／展覧会案内「火山灰から社会をよむー10世紀の巨大噴火と北東北ー」p.4-5／活動レポート「第69回自然観察会」 p.6／活動レポート「第69回地質観察会」 p.7／インフォメーション p.8



平成27年9月19日(土)～11月23日(月・祝)
岩手県文化振興事業団創立30周年記念事業

■研究ノート

岩手のカワシンジュガイの現状と、保全に向けた調査

学芸調査員 渡辺 修二 (生物部門)

■カワシンジュガイとは

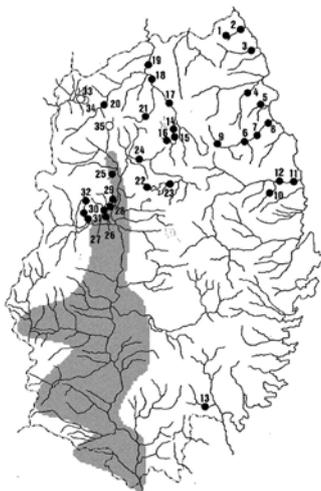
カワシンジュガイはイシガイ目カワシンジュガイ科に属する二枚貝で、夏でも水温が20℃を超えない、冷たくきれいな川に生息しています。



【Fig. 1】カワシンジュガイの標本 (館蔵) 殻長89.9mm

カワシンジュガイを含むイシガイ目の貝(イシガイ類)は、卵から孵化したばかりの幼生が魚のエラなどに寄生するという、特異的な生活史を持ちます。寄生の対象となる魚の種類は貝の種によって異なり、カワシンジュガイはヤマメ、イシガイ科はヨシノボリに寄生するほか、種によってはドジョウやオイカワに寄生するものもいます。

岩手県におけるイシガイ類の分布には特徴があり、カワシンジュガイは北上川水系、馬淵川水系、沿岸北部の各水系に生息しますが、イシガイ科は県北部には見られず、分布は主に県央から県南部の



【Fig. 2】岩手県におけるイシガイ目の分布。カワシンジュガイが確認された地点を黒点、イシガイ科の分布域を網掛けで示した。(岩手県立博物館研究報告 竹内ほか 2007を一部変更)

【表】岩手県に分布するイシガイ目の貝類

種名	宿主となる魚類	いわてレッドデータブック
カワシンジュガイ科		
カワシンジュガイ	ヤマメ	B**
コガタカワシンジュガイ	イワナ	A*
イシガイ科		
イシガイ	ヨシノボリ、オイカワ、カワムツ	A
ヨコハマシジラガイ	ヨシノボリ、ヌマチチブ、カワムツ	B
マツカサガイ	ヨシノボリ、ドジョウ、オイカワ、カワムツ	B
タガイ	ヨシノボリ、オイカワ、カマツカ	指定なし
ヌマガイ	ヨシノボリ、オイカワ、カマツカ	B
カラスガイ	ヨシノボリ	A

このほかに移入種であるフネドブガイの一部に生息する。*絶滅の危機にある種、**絶滅の危機が増大している種。宿主となる魚類は、日本産イシガイ目貝類図譜(近藤 2008)から引用した。

北上川水系に限られます。

なぜこのように分布しているのか、理由はよくわかっていません。イシガイ科の貝は北海道や青森県にも生息することから、今後の調査で他の水系でも新たな生息地が見つかるかもしれません。興味のある方は探してみてください。(発見されましたら、ぜひお知らせください)

■イシガイ類は絶滅危惧種

タガイ以外のイシガイ類は、絶滅危惧種として、いわてレッドデータブックでAまたはBランクに指定されています。特にコガタカワシンジュガイの生息状況は悪く、近年は生息が確認できていないようです。カワシンジュガイも絶滅の危機が増大している種として、Bランクに指定されています。

カワシンジュガイは、かつて県内の多くの河川に生息していました。しかし、河川利用が進み、河川改修が行われるようになってから急速に衰退したと考えられています。

河川改修は、工事のために水を堰き止め、流れを変えることで、貝の生存に直接影響を与えます。改修により川幅が拡大されると、水利用の増加も影響して水深が浅くなり、水温の上昇を招きます。工事の際に河畔林が伐採されることも、水温の上昇を促進します。砂防ダムが作られ、三面がコンクリートで固められ、

直線化した水路では、河床に砂礫が堆積せず、貝が生息する環境が失われます。

このほか、増水による河床の攪乱も個体数を減少させます。昭和20年代のカスリーン台風、アイオン台風による洪水の影響は大きく、閉伊川や猿ヶ石川での絶滅を引き起こしました(岩手県立博物館研究報告 佐竹ほか 1984)。最近の調査の際にも、増水によって川岸に打ち上げられた貝が百個体以上見られました。



【Fig. 3】打ち上げられたカワシンジュガイ川の蛇行部の内側に、1ヶ所あたり30個程度が打ち上げられていた。

さらに、過剰採集も絶滅の危機を増大させます。かつて業者による大量採集があったため、岩泉町などでは天然記念物に指定して保護しています。現在も業者や個人による販売が行われており、県内の生息地も採集の対象になる恐れがあります。

■イシガイ類と生物多様性

絶滅危惧種として注目されるイシガイ類ですが、河川の生物多様性の指標となる生物としても注目されています。

イシガイ類が生息できるということは、貝が定着できる量の小石や砂が川底

にあることを示します。イシガイ類が生息することで河床の形状に変化をもたらす、周囲に有機物を排泄することで、河床の水生昆虫の生息環境に影響を与えていると考えられています。イシガイ類の再生産が行われていれば、その生息地付近に、宿主となる魚類がある程度の密度で生息することも示します。

また、コイ科タナゴ亜科の魚類（タナゴ類）は、イシガイ類の内部に産卵するため、繁殖のためにはこれらの貝の存在が欠かせません。

北上川水系以外の河川には、カワシンジュガイしかイシガイ類が生息していないので、これらの河川に生息するタナゴ類は、カワシンジュガイを頼りに繁殖しています。従って、これらの川からカワシンジュガイが失われると、同時にタナゴ類も絶滅を迎えることになります。

■カワシンジュガイの個体数は多い？

以前は盛岡以北でしかカワシンジュガイの生息地が見つかっていませんでした（竹内ほか 2007）。その後、北上市や花巻市で新たな生息地が報告され（北上市立博物館報告 佐竹・菊池 2009、佐竹 2013）、分布が県南域にも及ぶことがわかってきました。

実際にカワシンジュガイの生息地に行くと、場所によっては貝を踏まずには歩けないほど川底に数多く生息しており、箱メガネで見ると、貝が大きな集団をつくっている様子を観察できます。このよう



【Fig. 4】カワシンジュガイの集団
多いときには千個以上に達する集団をつくる。

な状況を見ると、本当にこの貝は絶滅危惧種なのかと疑問に思うかもしれません。

しかし、もし個体群が大型の個体ばかりで構成されているなら、その集団ではカワシンジュガイの再生産がうまくいっておらず、稚貝が見られない「少子化」が起こっているかもしれません。

イシガイ科の寿命は10年程度ですが、カワシンジュガイの寿命は100年程度あるので、再生産が行われなくても数十年の間は生息を確認できることになります。このような河川では、一見すると多くの貝が生息するように見えますが、遅くとも100年後までには絶滅してしまいます。

■少子化の原因

カワシンジュガイの少子化の主な原因は、貝の生息地周辺で宿主のヤマメの生息密度が減少したためだと考えられています。これは、その川全体でヤマメが減少したというよりも、貝の生息地の上・下流に、ヤマメの移動を妨げる堰が設置されたことが影響しています。



【Fig. 5】生息地を分断する堰
堰でヤマメの移動が妨げられると、貝の再生産効率が低下する。ヤマメと切り離された集団もある。

カワシンジュガイの幼生が寄生すると、ヤマメの体に二度目の寄生を防ぐ免疫が生じます。ですから、寄生の対象となるのは、まだ一度も寄生されたことのないヤマメだけで、通常は生まれて1年以内の個体に限られます。

新たに誕生したヤマメが十分な密度で生息しなければ、幼生は寄生できなくなり、稚貝にまで成長できません。親貝の繁殖行動に問題がなくても、次世代が育たないことになります。

■保全のためになにをすべきか

岩手県では、カワシンジュガイの再生産が確認された河川が各地にあるので、まだ少子化の心配はないかもしれません。しかし、過去に再生産が確認された河川でも、新たな堰の設置等があれば、その影響を再び調査する必要があります。また、生息地が分断されていることを考慮すると、ある個体群で再生産が確認できても、その河川全体で再生産が順調であるとは言い切れません。

今後も各地で河川工事が行われます。これは私たちの生活を守るために必要なことですが、水量を適切に管理することは、貝の生存にとっても必要な場合があります。その上で貝の生息地の保全を考えるためには、河川の流域中で、どの部分が再生産に重要な拠点であるかを調べ、守るべき地域をはっきりさせる必要があります。そのための調査では、それぞれの生息地を訪れ、個体群に稚貝が見られるか定期的に確認する必要があります。

このような調査を個人や一つの機関で実施することは容易ではありません。それぞれの地域で、この貝を守りたいと思う人が、それぞれの地域で守っていくことが大切だと考えています。そうでなければ、100年を待たずにその地域からカワシンジュガイは失われてしまうかもしれません。

これからも調査を継続し、地域の皆様と協力して、この貝を守っていきたいと思います。



【Fig. 6】カワシンジュガイの稚貝
殻長は9mmほど。ここ数年の間に再生産が行われたことを示す。

■展覧会案内 岩手県文化振興事業団創立30周年記念事業

テーマ展 「火山灰から社会をよむ —10世紀の巨大噴火と北東北—」

会期：9月19日(土)～11月23日(月・祝) 会場：特別展示室

10世紀前半、北東北は2つの大きな火山噴火に襲われました。一つは西暦915年(2015年から数えてちょうど1100年前)に発生したとされる十和田(十和田湖)の噴火、もう一つは920年代末～940年代に発生した白頭山(中国・北朝鮮国境)の噴火です。前者は過去2000年間で国内最大級、後者は同じく世界最大級の噴火とされ(早川由紀夫1994「日本の2000年噴火カタログ」)、当該地域の人々はその影響を続けざまに受けていたと考えられます。

しかし、その災害の全貌は明らかになっておらず、多くは謎のままです。当該地域に関する文献資料が極めて少ないこの時代、解明の糸口は考古学的なアプローチに求められます。実際、北東北各地の遺跡発掘調査では、これらの火山灰によく出くわします。ところが、そこから過去の災害の様子を明らかにできた事例は決して多くありません。直接的な物証(イタリア・ポンペイのように火砕流で一瞬にして埋没してしまった遺跡など)はごく一部に限られ、大多数は火山灰が見つかるものの人間・社会に対してどの程度の影響を与えたのか因果関係が掴めない、間接的な物証にとどまります。この事件を「立証」すること、すなわち災害を復元することは一筋縄ではいかず、長年の謎なのです。

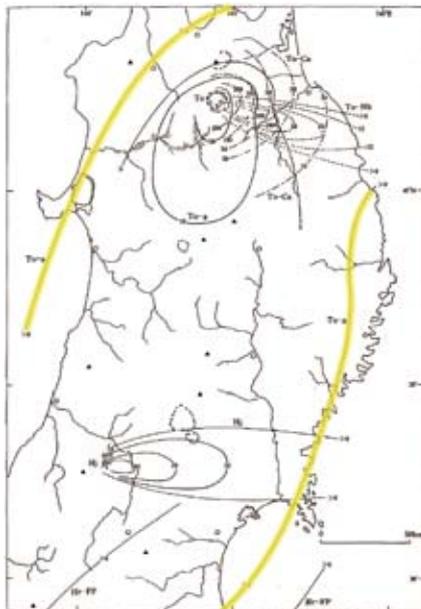
本展は、考古学からこの謎に迫ってみようという企画です。その方法はいたって地味ですが、考古学は概して個々の事象分析と解釈の地道な蓄積から成り立っています。今日まで膨大な量が記録されてきた遺跡発掘事業調査資料、いわば「ビッグデータ」を対象に、その分析方法と結果について、ここでは十和田火山の噴火前後に絞ってご紹介していきます。

1 活火山「十和田」

青森・秋田県境に位置する十和田湖は、日本有数のカルデラ湖です。このカルデラの原型は、旧石器時代に起こった2回の巨大噴火で形成されたと考えられており、縄文時代以降も大規模な噴火を少なくとも8回起こしています。火山噴火予知連絡会は、活火山の定義を「概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」としており、十和田もその一つです。その活火山・十和田で起こった最も新しい噴火が、平安時代・10世紀前半に発生した「噴火エピソードA」と呼ばれるものです。

この噴火イベントでは、「十和田 a (To-a)」と名付けられた火山灰が噴出しました。その降下範囲は南方約300kmにまで及び(図1)、まさに東北一円をバックしてしまったのです。

また、この時には大規模な火砕流も発生しました。「毛馬内火砕流」と名づけられたこの火砕流は、大湯川から米代川沿いに流れ下り、泥流となって能代まで到達しています。



【図1】 To-aの等層厚線図
※黄線の内側が降灰確認範囲
(町田・新井2003『新編 火山灰アトラス』)

2 遺跡に残る噴火の爪痕

To-aは遺跡にどのような状態で介在しているのでしょうか。実際に発掘調査で見つかった竪穴住居の堆積事例を見てみましょう。



【写真1】 竪穴住居内に堆積したTo-a
(二戸市 大向II遺跡)
提供：(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写真1は、二戸市似鳥の大向II遺跡で調査された平安時代の竪穴住居です。白く見えるのがTo-aで、その厚さは約80cmもあります。ただし、これはすべて「降り積もった」ものではなく、大半は雨水などで流れ込んだ、つまり「たまった」ものです。よく観察すると、最下層に「降り積もった」火山灰が10cmほどの厚さで確認できます。

火山灰は雨水などで容易に移動するため、窪地にどんどんたまっていきます。そして乾燥するとセメントのように固まる性質があります。雪と違って決して解けないため厄介です。

成層する例だけでなく、火山灰は実にさまざまな堆積様相を見せます。写真2はTo-aが塊状に散在したパターンです。攪拌されず成層していれば自然の営力による堆積といえますが、塊状になる場合はさまざまな要因が考えられるため、堆積過程も時期の判断も難しくなります。



【写真2】 竪穴住居内に塊状に散在したTo-a
※所々に見える白色のつぶつぶ
(二戸市 桂平I遺跡)
提供：(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

3 火山灰から社会をよむ方法

このようにさまざまな状態で姿を見せ

る火山灰ですが、ここから「災害」を復元することは前述のとおり容易ではありません。災害とは、人間が関与して初めて成立する概念です。いくら人間が作った遺構に堆積していても、それが人間活動と時間的にどのような関係にあるか判断できなければ、自然現象としての(ただの物質としての)火山灰でしかないのです。よって、まずは遺構がいつの時代に存在し廃棄されたものであるのかを知る必要があります。

そのための方法は、火山灰が遺構のどこにどのように堆積しているかを確認し、いつ廃絶(場合によっては構築)したのか調べることです。図2は、火山灰の堆積様相と遺構の構築・廃棄時期を模式的に示した図です。これによって、十和田噴火前(Ⅰ期)から白頭山噴火後(Ⅵ期)までの6時期に区分することが可能です。一つ一つの遺構に対してこの検討作業を行い、時期を割り出していきます。遺構の時期がわかったら、次の作業は遺跡や地域ごとに時期的な特徴があるか否かの比較です。この結果、興味深い状況が見えてきました。

4 巨大噴火と地域社会

一さまざまな復興のかたち一

十和田平安噴火の前後を比較して考えてみます。

岩手県内陸北部、馬淵川中流域にあたる二戸付近は、奈良時代から平安時代前期(十和田火山平安噴火以前)まで大集落が営まれていた、この地方の一大拠点といえる場所です。しかし、To-aの噴出を境に集落・遺構数が急減します。青森県域でも、同じように奥入瀬川流域で急減する傾向が確認されました。

反対に、集落・遺構数が急増する地域もあります。安比川流域(二戸市浄法寺町から八幡平市安代地区にかけての一

帯)、秋田県米代川上~中流域、それに青森県上北北部です。

この違いは、何から生じるものでしょうか。二戸付近は十和田に近く、写真1のようにTo-aの非常に厚い堆積が確認される地域です。他地域と比較して被害の大きかった場所といえます。

奥入瀬川は唯一、十和田湖を水源とする河川です。噴火で川の状況が一変したであろうことは、容易に想像できます。

周辺地域の増減状況とあわせて考えると、馬淵川中流域から安比川流域へ、奥入瀬川流域から上北北部へ、という動きが見えてきます。これは、より被害が小さい地域への移動と捉えられます。ただ、安比川流域については決して被害が軽度ではなく、To-a降灰域全体から見ればむしろ「激甚災害地域」といってもよい場所です。同じような現象は、秋田県の米代川上~中流域でも起きていました。なぜこの地域に人が増えたのか。そこには、単純な避難行動ではない、「社会」からの移住要請があったと考えられます。安比川流域・米代川上~中流域と上北北部を地理的に比較すれば、前者は律令国

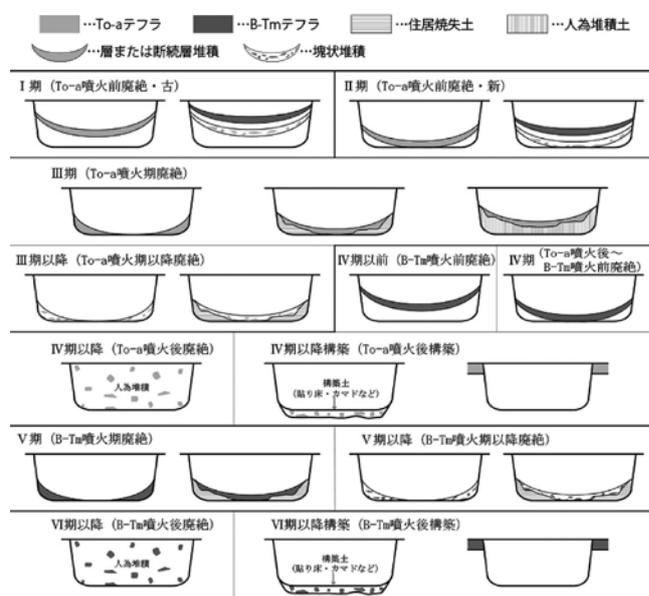
地域に近接しており、その影響を受けていたであろうことは容易に推定できます。つまり、「避難」ではなく強制的な「復旧・復興」の現れと考えられるのです。

以上のように、火山噴火イベントを画期とした時期区分の「フィルター」をかけることで、人・集落の動きが見えてきます。さらに、自然・人文両者の地理的環境というフィルターによって、火山災害に対する社会の動き(避難と復旧・復興)が見えてくるのです。

さらに、この時期区分を用いて生活用具(遺物)や住居の形・作り方など「物質文化」の編年を地域ごとに構築し、それを相互比較することで、より具体的な様相がわかっていくはずですが。

10世紀前半、北東北に住む人々は、私たちが経験したことのない未曾有の火山噴火に遭遇していました。遺跡から窺い知ることのできる噴火の実態と、火山災害を受けた人間・社会の対応と変容。これに対する現段階での回答を、ぜひ会場でご確認ください。

(考古部門 専門学芸員 丸山浩治)



【図2】火山灰堆積様相分類図(竪穴住居)

関連イベントのご紹介

- 展示解説会**
9月20日(日)^{※1}
10月17日(土)^{※2}
11月15日(日)^{※1}
- 県博日曜講座**
「遺跡からみた火山活動と人々の応答」
10月11日(日)^{※3}
講師 小野 映介氏
(新潟大学准教授)
- 「火山灰から社会をよむ」
10月25日(日)^{※3}
講師 丸山 浩治
(展覧会担当者)
- 考古学セミナー講演会**
「時空のかけはしー火山灰」
10月17日(土)^{※3}
講師 早田 勉氏
(火山灰考古学研究所 所長)
- 文化講演会**
「災害考古学のゆくえ」
11月3日(火・祝)^{※3}
講師 能登 健氏
(群馬大学講師)

※1... 14:30~15:30
※2... 11:00~12:00
※3... 13:30~15:00

■事業報告

第69回自然観察会「盛岡市外山森林公園昆虫観察会」

開催日 平成27年6月28日(日)

盛岡市外山森林公園は博物館から車で30分程度と近場にあり、ほどよく整備された自然観察路を歩いて気軽に北上山地の森を体験することができます。盛岡市民にとっては蕎麦処としてのイメージが強いようで、観察路を歩く人はあまり多くなく、静かな環境で自然観察を楽しむことができます。

今回の自然観察会は、当館研究協力員で、元岩手県農業試験場研究員の千葉武勝先生を講師にお迎えし、初夏の低山の昆虫観察をテーマに実施しました。

前日に強い雨が降り、開催が危ぶまれましたが、当日は小雨が時折降る程度に落ち着き、無事実施することができました。残念ながらチョウなどの昆虫が飛び様子は見られませんでした。雨の日に隠れている虫を見つけようという内容に目的を切り替えて、観察会がスタートしました。

講師の千葉先生が枝の下に網を入れ、枝を棒でたたいて隠れている虫を落とすピーティング採集を説明すると、さっそく小学生たちがあちこちの枝をたたいて、元気よく採集を始めました。そして何か虫が網に入ると「先生！この虫は何？ こっちは？」と次々質問し、千葉先生や博物館のスタッフが答えたり、参加者もそれぞれ知っている昆虫について、スタッフに代わって解説したりと、とてもにぎやかな観察会になりました。



【写真1】講師の千葉先生
採集した昆虫の名前だけでなく、特徴や生態をわかりやすく解説していただきました。

見つけた昆虫たちはどれも動きが鈍く、千葉先生の「昆虫は気温が15℃を下回るとほとんど活動しなくなります」とのお話に一同納得しました。この日は気温が10℃程度と肌寒かったのですが、昆虫を捕まえてじっくり観察するには適していたようです。

観察路途中にある池では、青色が鮮やかなエゾイトトンボが見られました。このトンボは、普段であれば近づくとすぐに逃げてしまうのですが、この日は簡単に捕まえることができ、手に取ってじっくりと見ることができました。

このほかにも、池の周囲の木や草で様々な昆虫が見られたほか、光沢のある緑色のエゾアシナガグモや、銀色に輝くシロカネグモも見られ、昆虫に限らず色々な虫たちを観察できました。水辺に張り出した枝にはモリアオガエルの卵塊が10個ほども見られるなど、自然観察に絶好のポイントでした。



【写真2】大人気の撮影モデル

写真2は、ストライプ地に黄色の斑が美しいオオノコメエダシャクの幼虫です。一目見るなり「きれい！」「かわいい！」と高校生たちが撮影会を始めるほどの大人気でした。こういったものを見せると、一般的には嫌がって悲鳴が上がるものですが、さすが昆虫観察会に参加する方たちは一味違うとを感じる一コマでした。

観察路ではクマイチゴやモミジイチゴが食べごろに熟しており、ときどき実をつまみながらの観察となりました。



【写真3】森のおやつ

今回の観察会で、天気以外に心配していたのがクマとの遭遇です。観察路途中にどうやらクマのお気に入りの場所があるらしく、トドマツの植林地ではクマが樹液目当てに引っ掻いた爪痕が見られます。この日は、まだ新しい糞がありました。クマには出会わずにすみましたが、最近人は人を恐れない新世代グマがいるとこのことで、これからは音を鳴らしながら歩くだけではクマを避けられなくなってくるのかもしれない。



【写真4】クマによって樹皮をはがされたトドマツ。この周りの木にも爪痕が見られた。

状況によっては午前だけで切り上げることも考えていましたが、なんとか予定通り午後まで実施することができました。昆虫は確認できたものだけで9目47科73種以上見つかり、このほかにクモやカエルなど様々な生き物を観察できました。熱心な参加者の皆様のおかげで、大変活発で楽しい自然観察会となり、スタッフ一同感謝しております。昨年に引き続き講師を引き受けてくださった、千葉武勝先生に改めて御礼申し上げます。

(学芸調査員 渡辺 修二)

■事業報告

第69回地質観察会「綱取の地層観察とイワシ化石採集」

開催日 平成27年7月5日(日)

岩手県北上市和賀町周辺には、新生代新第三紀中新世(約2300万～530万年前)と鮮新世(約530万～260万年前)にできた地層(中新統と鮮新統と言います)が広く分布しています。今回の観察会では、当館研究協力員の大石雅之氏を講師に迎え、和賀町に見られる菱内層と綱取層(中新統)、それに竜ノ口層(主に鮮新統)と呼ばれる3つの地層の観察と化石の採集を行いました。

観察会前日の朝に盛岡市では大雨に見舞われたため、悪天候や河川の増水が危惧されましたが、当日は晴天に恵まれ、小学生を含む多数の参加者と観察会を行うことができました。

午前中に和賀町に集合して開会式をすませた後、全員で菱内川に移動しました。菱内川の川沿いにはヒシナイワシの化石を採ることができる菱内層の露頭(左下図)が見られます。菱内層は今から約900万年前に海の中で堆積した地層です。この場所では、古くは1960年代に既にヒシナイワシの化石調査が行われており、他にも植物や二枚貝など多数の化石が見つかることが知られています。

大石先生から菱内層の解説をしていただいた後、化石の採集を始めました。採集を始めるとすぐにヒシナイワシの鱗の化石が見つかりました。しかし、頭から尻尾まですべてそろった完全な個体はなかなか見つけることができません。そ



菱内川での化石採集の様子

れでも午前中の採集時間が終わるまでには、何人もの参加者が背骨や肋骨のそろった綺麗なヒシナイワシの化石を採ることができました。他の地域では滅多に見ることのできないきれいな鱗や骨の化石を見つけるたびに、参加者から驚きと喜びの声が上がりました。また、実際に魚の化石が地層から産出することを目にし、900万年前の北上市がまだイワシの泳ぐ海の中であったことを実感できました。

午後になると和賀川沿いの綱取に移動し、綱取層の観察を行いました。綱取層は午前中に観察した菱内層よりも古い時代にできた地層と考えられています。また綱取層には軽石や、火山灰が元になって形成された凝灰岩と呼ばれる岩石の層が多数見られ、大昔にこの周辺で大規模な火山活動があり、それによって綱取層が形成されたことが伺えます。

ダイナミックな露頭(右上図)の前で、大石先生から綱取層の解説と、綱取の大露頭と呼ばれている巨大な断崖がどのようにしてできたかと推定されるかを解説していただきました。また、この露頭がかつて「綱取断層」と呼ばれていたことに触れ、「断層」と「断崖」の違いについても説明していただきました。巨大な綱取層の露頭を前にすると、我々は気の遠くなるほど長い時間をかけてできてきた大地の上で生活をしているのだということを感じることができました。

最後に石羽根ダム付近に移動し、竜ノ口層と化石密集相を観察しました。竜ノ口層は綱取層とは逆に菱内層よりも新しい時代(およそ500万年前)に海の中でできた地層と考えられています。竜ノ口層はもともと宮城県の仙台市内の地名にちなんで命名された地層で、「竜ノ口動物群」と呼ばれるほどの多数の動物の化石



綱取の大露頭を前に綱取層の解説

が見つかることで知られています。実際に石羽根ダム下流の河岸からも、カキを含む二枚貝や炭化した木の化石、さらにはかつてこの場所に住んでいた動物が作ったと考えられる巣穴など、多数の化石を観ることができました。なかでも、カキの化石はまるでカキ礁がそのまま化石になってしまったかのような産状を呈しており、さらにその地層が遠く離れた対岸にまで続いている様子を見ることができました。広い和賀川を横切り、左岸から右岸まで続く化石カキ礁を目の当たりにすると、まるで地層がこのままだとも続いていくかのような錯覚を覚えました。

岩手県内にはこのようにすばらしい地層や化石を観察できる場所がまだまだたくさんあります。今後も野外で実物の化石や地層に触れることで、岩手県の地質に関する理解を深める機会を提供することができればと考えております。

最後になりますが、当観察会の準備・運営に多大なご協力をいただきました、北上市立博物館や三陸ジオパーク推進協議会、その他各関係機関の職員の皆様、及び近隣住民の方々に心よりお礼申し上げます。

(学芸員 望月 貴史)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション (2015.9.1~2015.12.31)

お知らせ

- 資料整理のため休館 9月1日(火)～9月10日(木)
資料整理のため9月1日(火)から9月10日(木)まで休館します。
- 敬老の日 65歳以上入館無料
9月21日(月・敬老の日)は、65歳以上の方は無料で入館できます。

展覧会

- ◆震災復興・国立科学博物館コラボミュージアム
「生物界の怪しい仲間たち一科博のコレクションから」
平成27年9月25日(金)～11月8日(日) ミニプラザ
国立科学博物館のコレクションから選びぬかれた「怪しい不思議なモノたち」が大集合!
- ◆テーマ展「火山灰から社会をよむー10世紀の巨大噴火と北東北ー」
平成27年9月19日(土)～11月23日(月・祝) 特別展示室
10世紀前半、北東北は巨大噴火に2度も襲われました。しかし被害の全貌は未だに不明です。考古学からこの謎に迫ります。
- 展示解説会 特別展示室 要入館料
9月20日(日) 14:30～15:30 10月17日(土) 11:00～12:00
11月15日(日) 14:30～15:30
- 日曜講座 当日受付 聴講無料
10月11日(日) 13:30～15:00 講堂
「遺跡からみた火山活動と人々の応答」小野 映介氏(新潟大学教育学部准教授)
10月25日(日) 13:30～15:00 教室
「火山灰から社会をよむ」丸山 浩治(当館学芸員)

考古学セミナー講演会

- 10月17日(土) 13:30～15:00 講堂 当日受付 聴講無料
「時空のかけはしー火山灰」講師(燗火山灰考古学研究所所長 早田 勉氏)

文化講演会

- 11月3日(火・祝) 13:30～15:00 講堂 当日受付 聴講無料
「災害考古学のゆくえ」能登 健氏(群馬大学講師)

県博日曜講座

- 第2・第4日曜日 13:30～15:00 ※12月13日は13:30～16:00
講堂・教室 当日受付 聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
- *展覧会関連講座
9月13日「瓦からみた岩手の古代史～胆沢城から平泉～」
鎌田 勉氏(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査課長
9月27日「岩手に「弥生文化」はなかった?」金子 昭彦(当館学芸員)
- *10月11日「遺跡からみた火山活動と人々の応答」小野 映介氏(新潟大学准教授)
- *10月25日「火山灰から社会をよむ」丸山 浩治(当館学芸員)
- 11月8日「享保の産物調査と盛岡藩」齋藤 里香(当館学芸員)
- 11月22日「砂金の母岩をさぐる」吉田 充(当館学芸員第二課長)
- 12月13日「日本の水草を調べると分類する・守る」志賀 隆氏(新潟大学准教授) 13:30～15:00
「岩手県の植物相～分かったこと、分らないこと～」鈴木まほろ(当館学芸員) 15:00～16:00
- 12月27日「国体今昔物語ー明治神宮競技大会から国民体育大会へー」原田 祐参(当館学芸員)

観察会

- 第70回自然観察会「森吉山の名瀑を訪ねる」※要事前申込み
9月27日(日) 6:30～18:30 秋田県森吉山ノロ川流域
紅葉のブナの森を自らの足で歩き、名峰森吉山を代表する見事な滝・桃洞の滝を訪ねます。
講師:藤井 忠志(当館学芸部長)
定員:25名程度(最小催行人員24名)
対象:小学校高学年以上 参加費:4,500円
応募期間:8月28日(金)～9月20日(日) 定員充足したい締切
申込み先:株式会社岩手県北観光(電話:0120-183-705)
問い合わせ先:岩手県立博物館
自然観察会担当(電話:019-661-2831)
- 第70回地質観察会「大船渡市付近のカンプリア紀～白亜紀にわたる火成岩類」
10月11日(日) 10:00～16:00 大船渡市 ※要事前申込み
大船渡市三陸町で最近確認された国内最古級(約5億年前)の花崗岩や火山砕屑岩などを観察します。
講師:土谷 信高氏(岩手大学教育学部教授)
定員:20名程度(小学校高学年以上) 参加費:100円(傷害保険料)
応募期間:9月18日(金)～9月25日(金) 午後5時
申込み先・問い合わせ先:岩手県立博物館
地質観察会担当(電話:019-661-2831)

博物館まつり

- ◆第7回岩手県立博物館まつり
10月4日(日) 9:20～16:00 芝生広場ほか 小学生以下対象
当日受付 一部定員あり 参加無料
さまざまなコーナーに参加して、博物館をもっと楽しもう!

まが玉づくり、化石のレプリカづくり、石臼ひき、昔あそびなどの体験コーナーがもりだくさん!

週末の催し

- ◆ミュージアムシアター
毎月第1土曜日 13:30～15:00前後 講堂 当日受付 視聴無料
10月3日 中学生～一般向け(のべ93分)
火山災害を知る《25分/実録》
火山との共生～岩手山防災を考える～《25分/実録》
菅江真澄の旅 岩手編～いではみちの奥見にまからん～《43分/実録》
11月7日 一般向け(85分)
宮沢賢治関連作品
グスコブドリの伝記《85分/アニメ》
12月5日 幼児～小学生向け(のべ75分)
クリスマス関連作品
ミッキーマウスの楽しい冬《10分/アニメ》
サンタさんはだいそがし《12分/アニメ》
ミッキーマウスのメリークリスマス《30分/アニメ》
くまのおいしゃさん すてきなコンサート《23分/アニメ》
※9月5日はお休みします。
- ◆チャレンジ!はくぶつかん
毎月第2・第3土曜、日曜、祝日、臨時閉館日 小学生向け 随時受付
チャレンジ!マークをさがして はくぶつかんをたんけん!
9月 12日・13日・19日～23日 テーマ:食
10月 10日・11日・12日・17日・18日 テーマ:灰
11月 14日・15日・21日・22日・23日 テーマ:星
12月 12日・13日・19日・20日 テーマ:植物
- ◆たいけん教室～みんなでためそう～
毎週日曜日 13:00～14:30 幼児(保護者同伴)・小学生20名程度
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみよう。
※10月11日「こはくの玉づくり」は有料500円、その他は参加無料
※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。

- | | | |
|-----|---|------------------------------------|
| 9月 | 13日 竹トンボ
20日 恐竜ぬりえカード | 27日 ほのほのあかり |
| 10月 | 11日 こはくの玉づくり
18日 葉っぱのカラフルカード | 25日 ふしぎなビー玉おもちゃ |
| 11月 | 1日 手づくり万華鏡
8日 土器づくり
15日 石から絵の具をつくろう | 22日 たこづくり
29日 松ぼっくりのXmasツリー |
| 12月 | 6日 まゆで干支(申)づくり
13日 ごんげんさまのカスタネット | 20日 松ぼっくりのXmasツリー
27日 かんたん門松づくり |

9月	13日 竹トンボ 20日 恐竜ぬりえカード	27日 ほのほのあかり
10月	11日 こはくの玉づくり 18日 葉っぱのカラフルカード	25日 ふしぎなビー玉おもちゃ
11月	1日 手づくり万華鏡 8日 土器づくり 15日 石から絵の具をつくろう	22日 たこづくり 29日 松ぼっくりのXmasツリー
12月	6日 まゆで干支(申)づくり 13日 ごんげんさまのカスタネット	20日 松ぼっくりのXmasツリー 27日 かんたん門松づくり

冬のワクワク!ワークショップ

- 平成27年12月23日(水・祝) 受付時間 9:45～11:30 / 13:00～15:00
当日受付(予約不要) 参加無料 ※混雑時は待つことがあります。
「化石のレプリカ」か「まが玉アクセサリ」、どちらか選んで工作しよう。所要時間 約35分。詳細はお問い合わせください。
定員:各100名 対象:幼児(保護者同伴)～小学生

定時解説

- 平日～土曜日 13:30～14:30 / 日曜日 10:30～11:30
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご希望におこたえています。
※10月4日(日)は「第7回はくぶつかんまつり」のため、お休みします。

利用のご案内

- 開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)
- 休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※ただし、9月21日は開館、9月24日は休館します。
年末年始(12月28日～1月4日)
- 入館料 一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料
()内は20名以上の団体割引料金
※9月21日(月・敬老の日)は65歳以上入館無料
※11月3日(火・文化の日)は入館無料
※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第146号 平成27年9月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
------------------------------------	---